

噴門部癌アトラス

南風病院消化器内科 編

胃癌を扱う臨床医必携の書

平戸市国民健康保険度島診療所

浜 田 勉

噴門部とされる食道胃境界部のごく狭い範囲は、X線検査においても内視鏡検査においても観察が不十分となりやすく、病変の認識および診断、特に癌の早期発見がしばしば困難である。多くの消化管の専門家ですら経験できた症例は少なく、日常臨床検査で大きな盲点となってきた。

編集代表である西俣寛氏は、噴門部癌における膨大な症例の集積と多数の研究論文を発表してきた日本における第一人者であり、まさに、『噴門部癌アトラス』は待望の書と言えよう。本書で示されている多くの症例画像は、西俣氏と鹿児島南風病院グループが噴門部癌にじっくり焦点を合わせ、症例を長年にわたり追い続けた結果の集大成であり、薩摩魂の真骨頂をみせている。

本書は厳選された50例で構成され、その症例ごとに丁寧なX線や内視鏡画像とともに切除標本と病理組織像が提示され、症例の本質をつ

いた表題と簡潔なコメントが記されている。掲載された症例は癌深達度がM癌(17例)からSM癌(18例)、そして進行癌の順で、すなわち癌の形態的变化が軽微のものから次第に凹凸の変化が明瞭なものへと工夫して配列されており、これにより読者は噴門部癌がその発育に従い形態的な変化が顕著になっていく様を知ることができるだろう。特に早期癌症例の精密なX線像、色素散布像を混じた内視鏡像は秀逸で、思わず凝視するほどであり、編者たちのこれらの症例にかけた並々な熱意を感じる。さらに、具体的なコメントを読み進むうちに、噴門部以外の胃における早期癌の形態とは異なる噴門部癌の特徴を学ぶことができ、次第に癌による異常所見の指摘や癌の深達度の予測が可能になってくることを読者は実感するだろう。本書は噴門部癌を余すところなく画像で示しており、消化管癌、特に胃癌を扱

う臨床医にとって、内科医であれ外科医であれ、必携の書と言える。

形態診断学はX線や内視鏡画像により視覚的に疾患の本質をとらえようとするものであり、数字によるパーセントや有意差検定などの統計学的手法とは異なっている。したがって、提示される1枚1枚の病変の画像は、精密であるばかりでなく病理組織像を含めた形態を正しく表現しているかどうか常に求められる。そのためには検査医の目を錬成していく必要があり、その点でも本書は最良の教科書に仕上がっている。

どのような所見をどのようにとらえるかを追求して、日本は世界に冠たる消化管画像診断学を築き上げた。よりよき画像への日々の研鑽こそが疾患の解明への道であることを確信できる1冊である。

●B5 頁168 2010年 定価8,400円
(本体8,000円+税5%)

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)